備陽史探訪

第51号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

『太平記』への招待
～南北朝時代の備後～

会長　田口　義之

今年は〝太平記の年〟と言っていいくらい南北朝時代が一つのブームとなっている。

もちろん、これは今年のNHK大河ドラマが吉川英治原作の『太平記』を取り上げたことによるが、太平記の時代は、一面〝地方の時代〟と言っても良いぐらい全国各地の武士達が活躍した時代である。

わが備後地方も例外ではない。古典『太平記』をひもといてみても多くの備後武士達が登場する。私達の郷土はこの時代になってやっと〝歴史時代〟に突入したと言っても良いだろう。

以下、この時代の主な備後武士と主な合戦を紹介し、来る七月二十八日に開かれる〝太平記座談会〟への案内としたい。

桜山四郎入道　南北朝内乱のさきがけとなった備後武士。『太平記』によると、元弘元年九月、河内の楠木正成と共に後醍醐天皇に応じて備後一宮に挙兵。一時は備後半国を討ち従へ安芸、備中への進出を計ったと伝えるが、笠置山が落ち、楠木も自害（誤報）したと伝わると軍勢は離散、翌元弘二年正月、一宮吉備津神社の社殿に火をかけ、一族と共に自害して果てたという（太平記巻三桜山自害の事）

杉原信平、為平　福山市西町にある能満寺で世に出る機会を待っていた兄弟は、建武三年二月、西走する足利尊氏に鞆で随行、同年三月の〝多々良浜の合戦〟で抜群の戦功を挙げ立身のきっかけをつかんだ。この時、兄弟の奪戦に感動した尊氏は彼等の母衣（ホロ）に〝西国一の大功の者〟と自らしたため、のち兄の信平には備後国本郷庄木梨庄の地頭職を、弟為平には木梨庄半分地頭職を与えその功にむくいたという。備南の雄族木梨杉原氏の興りである。

江田泰氏　備北の武士で、建武三年六月、九州から上洛、後醍醐天皇を比叡山に追った足利軍にあって、山上の後醍醐軍に対し、〝備後の国の住人江田源八泰氏〟と名乗って一番に突進、叡山の悪僧杉本山神大夫定範と一騎打に及んだと言う（太平記巻一七山門攻事付日吉神託事）。

泰氏は鎌倉時代三谷郡の地頭として入ってきた広沢氏の庶流で、芸藩通志によると三谷郡向江田村（現三次市）天良山城主であったという。

三吉覚弁　彼も又、南北朝の内乱に自己の命運をかけた人物である。

覚弁は鎌倉時代に三次の地頭職に補任された佐々木氏の子孫で、先祖は承久の乱で天皇方について失脚。

内乱に再び世に出るのはこの時、と覚弁はいきみ立った。彼は終始足利尊氏方について戦功を挙げ、観応二年には久井庄泉村（現久井町）の地頭職を獲得した。しかし、彼の実力ではその支配も思うに任せず、父祖相伝の〝鼓の田畑〟（現神辺町下

太平記座談会
～南北朝時代の備後を探る～のお知らせ

（主催）　備陽史探訪の会
（時）　平成三年七月二十八日（日）
午後一時三〇分～四時三〇分
（場所）
福山市丸ノ内一丁目
福山城湯殿
（構成）
概説「南北朝時代の福山地方」
田口義之
個別発表
「南北朝時代の山内首藤氏」
出内博都
「バサラについて」
堤　勝義
「陶山一族の興亡」
後藤匡史
座談会　司会　神谷和孝
（会費）　無料
（参加方法）　申し込みは不要です。誰でも自由に討論に参加できます。飛入り発表大いに歓迎。
（懇親会）終了後、例年の通り、市内のビアガーデンで懇親会を催します。参加自由で希望者は電話で事務局までお申し込み下さい。
（問い合せ先）　事務局まで。

竹田）を子息〝さやいろこくら〟に譲ったのもつかの間、彼の死後、所領は一族に押領されてしまった。

宮兼信と盛重　しかし、この内乱をうまく乗り切った一族もあった。室町から戦国にかけて在地最大の勢力を誇った宮一族である。

この時代宮一族からは、終始尊氏方についた兼信と、反対派の南朝方或は足利直義方に属した盛重が現われ、両者がしのぎを削ることによって宮氏は勢力を伸ばして行った。

両者の行動を見ると、尊氏が優勢の時は兼信が前面に出、反対派が力を振うと盛重が活躍。結局彼等の活躍によって宮氏は備後最大の豪族となった。

鞆の攻防　南北朝の内乱で備後が主要な舞台となることもあった。

一つは瀬戸内の要港鞆の攻防である。鞆は、建武三年二月、西走する足利尊氏がこの地で光厳上皇の院宣を得、足利氏開運の地となったところであるが、以後もしばしば南北両朝の攻防の的となり、特に興国三年五月、この地を舞台に繰り広げられた〝鞆軍〟は有名である（太平記巻二二、義助朝臣病死事付鞆軍事）。

その後、鞆には貞和五年四月、足利直義の養子直冬（実は尊氏の長子）が中国探題として来住、いわゆる〝観応の擾乱〟が始まると、尊氏、直義抗争の最前線となった。

尊氏の腹心高師直は同年九月、備後の杉原為平に命じて直冬を九州に追い、ここに南朝、尊氏方、直冬方と中国地方を三分しての激しい戦いがくりひろげられることになる（太平記巻二十七、右兵衛佐直冬鎮西没落事）。

備後宮内合戦　運命の人直冬は養父直義の遺志をついで実父尊氏に戦をいどんだ。文和二、四年と上洛を果たすが二度とも父尊氏弟義詮の反撃にあって敗退、直冬の声望は次第に下り坂となった。そして、彼の没落を決定づけたのは又もや備後での戦いであった。

貞治元年、再起をかけた直冬は山名氏の後援を得て山陰より備後に兵を進めた。目標は備後亀寿山城に拠る宮入道々仙であった。

宮内（芦品郡新市町）に陣した直冬は、亀寿山城の宮氏と対戦すること約一年、翌貞治二年九月、反撃に転じた宮氏に敗れ、歴史の表舞台から消えて行った。

〝直冬はいかなる神のばちにてか宮にはさのみおじて逃らん〟

実父に刃向い、宮氏に一度も勝てなかったことを皮肉った落首である（太平記巻三十八、諸国宮方蜂起の事）。

この戦いは中国地方の帰趨を決め、宮氏の勝利によって直冬の敗北が決定し、同時に山陰の山名氏、防長の大内氏が相次いで幕府に帰順、世はようやく太平の時を迎えるのである。

南北朝七十年、備後武士はいかに戦ったか、七月二十八日の座談会に期待して欲しい。

太平記の時代から戦国時代

礫症から鉄砲症

堤　勝義

合戦に参加した武士の頭領は、号令者（大将）に対して、自らも含めて、いかに配下の武士が合戦に貢献し、傷ついたかを報告し、将来の恩賞にあずかろうとした。その報告書を「合戦手負注文」といった。

「合戦手負注文」によって、太平記の時代から戦国時代迄の合戦によって、何の武器で傷ついたのかをみてみたい。その事により、合戦の戦闘方法が、かいま見えるのではないかと考えられる。

正慶二年（一三三三）壬二月廿七日付で、安芸三入荘の熊谷直経が「合戦手負注文」（「熊谷家文書四一号」。大日本古文書所収…以下所収文書は同じなので略す）を六波羅に出している。楠正成が後醍醐天皇方として、反北条の兵を挙げた時に、熊谷直経は幕府方として参戦した。これは、熊谷直経が、千早城攻めに参加した時のものである。

（前略）

若党道山左衛門二郎経行、左ノ膝ノ節ノ上、長尾又太郎有能、ヲトカイヲ射透サル（異筆）「深」

幡サシ中平三景能、右ノ目ノシリヲ石ニウタレ候

右手負者、今月廿六日朝、茅岩屋城（千早城のこと…筆者注）大手ノ北ノ堀ノナカヨリ、ヘイノキワエセメアカリ、先ヲカケ、新野一族相共ニ、合戦ノ忠ヲイタシ候ニヨチ、手負注文如」件。

今月二十六日の朝、千早城の大手の北の堀のなかより、先をかけて、塀のきわえ攻めあがって合戦した時に負傷したと直経は書き、若党の道山左衛門、長尾又太郎が矢によって負傷、旗差中の平三景能が、石（礫）によって右の目の下を負傷したことを報告している。

此の戦いでは、矢と礫によって負傷したことがわかる。なお、旗差の

平三景能は、同年の三月五日の合戦には、「左ノホウヲイトヲサレ候」とあり、今度は矢で、二度目の負傷をしている。

正慶二年（一三三三）潤二月廿七日付の熊谷直氏の「合戦手負注文」によると、直氏も幕府方として、千早城攻めに参戦している。

此の文書は、『古文書にみる安芸・備後の南北朝動乱と情報』（広島県立文書館の展示図録）に取りあげられているので、参照されたい。以下概略を記してみる。

（前略）…於昨日廿六日御合戦者、直氏登先、責寄木戸口相戦之処、被打破数十枚之楯、直氏等被疵訖とあり、直氏は右股の骨を矢で徹され（異筆「浅」とある）、西條又次郎や旗差の紅四郎も矢で負傷している。そして、此の他として、礫（大石か）に打たれて、命を落としたものが数名いたことを書いている。

直氏は率先して、木戸口にせめ寄せて、戦ったが、並べていた楯の内数十枚が打ち破られて負傷したという。刀疵でないので、白兵戦ではないようである。矢攻撃によって、楯数十枚が破壊されるということは考えにくいのと、礫によって数名が死亡したことを考えると、大石攻撃によって楯が破壊されたと考えられるのではないか。そのことによって、礫による数名の死亡者（普通の礫攻撃によって、数名の死者が出ることは考えにくい。よほど当たり所が悪ければ、死ぬ者も出るであろうが）が出たのではないかとも考えられる。

楠軍は、矢や礫（大石や普通の石）で対抗したことがこれによってわかる。

合戦に鉄砲が出てくるまでは、矢や槍と共に礫攻撃も重きをなしていた。

山梨に在住されていた故中沢厚氏（宗教学の中沢新一氏の実父）の『つぶて』（法政大学出版）によると、武田信玄の「石投げ隊」として山路愛山の『徳川家康』を引用して次のように書いている。「信玄勝に乗って堀江の城に動かんとしたる処に家康、浜松より切て出で味三方原にて先ず足軽合戦始まる。やがて佐久間、平手等も駆け付けて両軍、大いに戦ふ。信玄は水股の者と名付けたる三百人ばかりの兵を真先に立てゝ進み来る。彼等は石を投じて戦ふものなり。之に次ぎて甲州一流の軍法に依り、密集したる数団の大軍太鼓を鳴らし歩武整々として大波の如く寄せ来る。とあり、武田軍には石投げ隊（水股の者）がいて、三方ケ原合戦の勝利に貢献したことを書いている。そして、また「しかし、よく訓練された武田の石投げ隊というのは、すぐこの後、戦場の花形になる鉄砲隊の登場の花道の役をはたしたのかも知れない。強剛をもってなった武田軍勢は、いく年も経ずして、同じ遠州長篠で織田信長の前にあえなく崩れさった。」と書いている。長年山梨で研究されていた氏の文章であると思う。

長篠の合戦において、織田信長が鉄砲隊を使って、武田軍を撃破したことは、これ以後の戦術に大きな転換をもたらすことになった。

ノエル・ペリンの『鉄砲を捨てた日本人』（川勝平太訳、中公文庫）によると、長篠の合戦以後、日本では鉄砲の増強が進んだことを書いている。「一五八九年、エリザベス女王は十バールのアンリがフランスの王位を確保するのを助ける目的でフランスに軍隊を派遣した。このイギリス軍はウィラビー卿に率いられ、四連隊、三千六百人より成っていた。一連隊は、理想的には、銃砲兵六〇％、槍兵三〇％、ほこやり兵一〇％で構成すべきものであった。ところが現実策として枢密院は、ロンドン・ケント・サセックス・ハンプシャーの諸州の各連隊に対して銃砲三〇％、槍六〇％、ほこやり一〇％で武装するよう」呼びかけたが、どの連隊も鉄砲にこと欠き、銃砲あわせて、千百挺足らずで、フランスに出発したという。同時代の日本と比較して、「一五八四年、日本では神州六十六ケ国のやっと一国を支配下に納めつつあった戦国大名竜造寺隆信が島原方面で有馬晴信・島津家久と対戦したが、率いていた軍勢は二万五千、そのうち約九千が銃砲隊であった（その火縄銃はかなり大型のものであったから、むしろマスケット銃と呼んで差しつかえないようなものであった）」とある。有馬晴信がキリシタン大名であったことから、イエズス会の宣教師の報告書を資料にしているものと思われる。

応仁元年（一四六七）の今出川東合戦の時の吉川元経の「太刀打手負注文」（『吉川家文書之一』三二三号）によると、矢疵や鑓疵の他に、飛礫の負傷者が三人いる。同年の十月三日の北少路高倉合戦の時にも、吉川元経方は、鑓疵が二人と飛礫の負傷者が二人出ている。応仁の乱の時にも礫が飛んでいることがわかる。

天文廿一年（一五五二）に毛利氏

が、尼子方の志川瀧山城に押し寄せ、合戦した時に負傷した毛利氏方は、百五十六人であった。また死者は七人であった。

負傷者の内訳は、矢疵が九十七人、鑓疵が三十一人、礫疵が二十七人、切疵が四人であった（数の中には複数の疵を受けた者がいる）。矢疵が最も多く、全体総数の六十二・二％であった。礫疵も約十七・三％を占めていた。切疵が少なく、鑓疵が多いのは、志川瀧山城方が、遠くから矢を射て、敵が近づくと槍で〃つく〃というのが戦法であったことがわかる（『毛利家文書之一』二九三号）。

永禄六年（一五六三）十一月十三日付で、吉川元春が軍忠状を毛利元就に出している（『吉川家文書之一』五一一号）。此の軍忠状は、尼子と合戦をした「雲州嶋根県白鹿要害詰口と熊野表」での分捕頭と疵人数（白鹿詰口）を提出したものである。

此の軍忠状によって初めて、鉄砲疵が出てくる。鉄砲隊の登場である。負傷者は四十四人である。内訳は、鉄砲疵は三十三人、矢疵は六人、礫疵五人、切疵は一人（同一人で二度の傷を受けたものも含む）である。鉄砲疵が全総数の七十五％を占めている。礫疵も五人と少数であるがいる。此の合戦においては、鉄砲の使用が主流をなしていることがわかる。

慶長五年（一六〇〇）八月廿六日付で、吉川廣家が「伊勢国津城合戦手負討死注文」を堅田元慶に出している。負傷者は一六一人である。その内訳は、鉄砲疵九十七人、やり疵五十二人、矢疵二十一人となっている。鉄砲疵が全体総数の約六〇・三％で、やり疵も約三二・三％いる。礫疵は0人となり、まったくなくなっている。石投げ隊はいなくなったものと思われる。

秀吉の朝鮮出兵後に合戦の戦術転換があったものかとも思われる。

合戦の時に、何の武器によって負傷したかを「合戦手負注文」によっや粗く調べてみた。矢や礫・槍が合戦において、長年重要な戦術上の武器であったが、近世に近づいて来ると、鉄砲の重要性が増してくることがわかる。（一九九一、六）

〃中世を読む〃雑感

出内　博都

田口会長の発案で〃中世を読む〃というグループ学習が始まって何年になるか、山内首藤家文書が量的に適当でもあるし、地もとの土豪という親近感もあり、手さぐりで始めた。

毎月第三金曜夜を原則として十人前後の小人数の集いである。印刷本なので個々の文字は読めるが、何しろ不規則な漢文体、中世独特の用語、読めても内容がわからぬで更に疑問が深まる。段々と面白みも加わって現在では原文の写真版に挑戦している。〃歌は世につれ、世は歌につれ〃という諺があるが〃文字は時代につれ、ことばも時代につれ〃とでもいうか、異体字、誤字、現在と異る用語の解釈などなど、文書一枚に一家の運命をかけた数百年の紙面、現在の様にワープロがあるでなし、ファックスがあるでなし、まして字の読み書きができる人間が少ない時代、数百年を生きのびてきた古文書の一行一行にどれだけの人の思いが宿っているか…面白さを通して、おそろしい気がしてくる。この度は中間報告の意味で今までに接した、異体字、あて字、誤字、現在とは少し違った意味に使われている用語など、紹介させて頂きます。

（異体字、当て字、誤字、略字などの部）

備後　泉方　宝（いえども）

地頭職　相遂　相禾（互）　并（並）

遂根（遺恨）　笑（養）　筥根　大神（輔）　尼（尼）　荘彼所（のぞむ）　別帝殿中（最中）　弃置

訖（おわんぬ）　粉足（料足）　兵粮析（料）　貢馬析所　死行（宛行）

厳蜜　遠変　勿躰（もったい）　敵（敵）　為中（いなか）　入魂（魂）

昔（時）　備後沙（砂）　旨（旨）

珠（珍）　恵蘇（蘇）　勲（勤）

充行（あてがう）　頸（首）　李季（年季）　出陳（陣）　陳拂（陣拂い）　御上俵（表）　符中（府中）

契釣（約）　礑（はたと）　迷惑候

紹（詔）　城椰（郭）　爲地（箭地）

造果（果）　役夫（役夫）

以上は山内首藤家文書、小早川家の一部の中から抽出したものである。単なる誤字もあるかも知れないが、文書によれば同じ誤字が繰返されているので、今ほど厳密に考えていなかったように思える。

（語句の使用方で現在と若干異ると思えるもの、および読解困難なもの）

寄牌＝ことよせる。ふけうの仁＝不孝の人。直銭＝現金という意と思える。現形（げぎう）＝裏切り。忰家＝相手に対して当方を謙遜した語。（輝元様御納得之段、忰家之満足此事候）

馳走＝あれこれ心遣いをして取りはかろう（御気遣儀共候者、乍勿論致

馳走者）（自今以後、御馳走肝要候）戦争することも含む。褒美＝与える物より、その行為を意味している（一段如何様可令褒美候）　万疋の地＝一疋十文、十万文即ち百貫の地去又＝さてまた。自専＝自分自身の判断。あい拘え＝胸のうちに秘めておく。自然＝万一、もしもの事（自然の儀においては）　綺（いろい）＝干渉すること。知音すべかず候＝味方すべからず候。相支うと云々＝反対する。反抗する（東寺百合文書）見相に＝見つけ次第。押し置き＝没収する。すいけう人＝推挙人、仲介人。筋労を加え候＝圧力を加え候。納馬＝帰陣。執出＝とりで、砦。不弁＝不足がち、貧しい。事旧候＝周知の事。退転＝精神を怠ること。出世衆＝公家の子息が出家して高位に昇った者。当病＝病気中であること。射損い＝弓矢で射て彼害を与えること。乃貢＝官物、年貢。勘状＝審理の結果を記して提出する文書。淵底を極める＝双方の主張を十分に審議する。結番＝順番を定めて勤務すること。減気＝病気が恢方に向うこと。参差＝くいちがい。下部＝下人。農民の依怙たるべし＝自由処分にまかせる。沽却＝買却。亀鏡＝本来は模範という意味であるが、煩いが残らない証拠という意味が多い。

室町時代になって貨幣経済が進み土倉、酒屋などの金融業者があらわれ金銭関係に現在とは違った言い方が出てくる。

約束の日を過ぎ候わば、一倍の沙汰いたす＝今の二倍のこと。私出挙の利一倍を過ぐるを停止すべきこと＝二倍の利をとっては不可。利半倍＝五割のこと。質券＝返済不能の時に、質の引き渡しを約束する質券。見質＝借金をした時、同時に質地（物）を預ける。一色田＝田租だけは免除されているが、その他の雑役、公事が課せられる。濫妨＝秩序を乱す悪行。一代＝一段の五十分の一。害＝殺害。骨張せしむべけんや＝張本人としてのさばらせていいのか。徴粛を抱かん＝おそれつゝしむ心をもつだろう。狼唳＝狼のように心がねじけ、道理にそむくこと。拘措＝かくして出さない、かばう。夙夜＝朝早くから夜おそくまで。対悍＝年貢を納めないだけでなく、上級者にたてつくこと。嫁と聟が同じ意味に使われている。山内隆通が直通の養子となって直通は譲状に「嫁法士殿」となし、尼子経久は「山内聟法師殿」としている。要するに他家から入ったものは同じだったのか？

以上の用語は平素扱っている古文書以外に「古文書の語る日本史」（筑摩書房）を参考にさせて頂きました。

城郭研究部会主催

第四十二回中世を読む会の御案内

（テーマ）　中世武家文書を読む
－今回は中世の一揆契約状について－
（時）七月十九日（金）
午後七時～九時
（場所）中央公民館　2F和室
（会費）テキスト代のみ。参加自由
（問い合せ先）
（〇八四九）五五－〇五三五
出内博都

一九九一、親子古墳巡りに参加した一老人の記

小島　袈裟春

○大坊古墳は、以前二回程個人的に見学した事がある。三回目は昨年の御幸町探訪の時に立寄って居るので今回で四回となる。

古墳の入口には説明の看板が立ってはいるけれど、何んと云っても案内の講師の居ると、居ないとは大違いで、後期古墳の特長とか、編年を考へる上での問題点、とかは勿論の事、全員数こぎをして墳丘に登り、講師達自からの苦心作成の測量図によって説明を受け、形状の把握が出来た事は、この催しならずば……の収穫であった。

私しは古墳に限らず、古墳跡等の初探険に一人で行く事も多いが、用心深い？私しはそれがそこに有る、と確認すると、詳しい観察は又後で、として一応徹退して仕舞う、それが遺跡巡りと云う催しでフォローアップして貰へるなんて本当に嬉しい事なのである。それにこの日（五月五日）は又とない好天であった、日は燦々と降りそゝぎ乾いた風が吹き渡って、暑くなく寒くなく、新緑の香りの中を聖徳太子と同時代の、この古墳を後にしたのである。

○安光群集墳、大坊から安光への道は古式の石垣が多かった、大坊の西の谷の山腹には花岡岩らしい大石が沢山露出して居て、大坊古墳の大石の出所と、石の加工技術とを関連させて、何んとなく一人納得して居た私しであったが、この群集墳は意外と思へる程見すぼらしかった。主墳と云うカンカン石古墳こそ（中に石仏が祀ってあって名称の由来が分

った）片袖式の羨道を持ち玄室も五、六人は入れる程の広さはあるが、他の四基は石も規模も格段に小さく、良くぞ残った、と云い度い位である。しかしその粗末な石室の辺りから真正面に、亀山の復合遺跡が見へて、何らかの関係が想像される。講師の先生もそれが云い度いのでは……そしてその小さい方が先祖でありと云う事も。今、付近には現代の墓地も沢山造られて居て、古代人の後裔を誇るかの如くであった。

○石槌山古墳群、この古墳は十年程前の発掘調査中から新聞報導され、現地説明会も持たれたのであったが地理に暗い私しは場所が判らず参加出来なかった、それ故の期待であった。今回、東の安光の方から地域道を歩いて段坪付近の池の近くに出たのであるが、そこが、かつてのあの場所とはとても思へなかった。私しが以前車で通った時は、うっ蒼とした木立に囲まれた狭く淋しい道であったのに、今はアッケラカンとした二車線の道に変って居た。その西の加茂町側に七百戸程の団地が売出し寸前に完成して居て、団地の西に残った小尾根の、一見給水塔とも見へる二つの高まりが、石槌山古墳なのであった。地図によると菱原地に達する尾根に吹越古墳群の円墳方墳八基がずらりと並んで居て、発掘調査で何れも剣や、玉などが出土したとの事であるが、今は総て幻と消えて、一区画？千万円也の宅地と化して居るのであった。菱原パンツ池（復刻判五一頁）の股の辺りにあった一号墳など地形的に残せば残せて優雅な姿なのに、アッサリ取払われて居た。さて石槌山古墳の二基は麓に現代の墓地を従へて、正しく黄泉の王者の風格であった。講師の先生に一号墳は、二段の列石と頂上に二つの埋葬主体と石ころを使った排水設備があって、四世紀後半の築造と教へられた、第一主体の木棺内には、鏡、玉、農工具などで武器類は棺外にあった事、第二主体内には武器類が多い事、等は何を物語るのであろうか、講師の篠原先生に「夫婦でしょうね」と水を向けたら「そう云う人も居るが第二主体は武器が多いのでね」とやんわり否定された。だが二つの主体は始めから二つと設計されたと私しには見へる、二号墳も同様である、夫婦でないとすると……加茂谷を始めて武力制圧した、と思へるこの王墳と、二号墳、更に吹越古墳群との関係は……又掛迫古墳との関係はなど私しの想像はふくらむ計りであった。

○猪の子古墳、を初めて見学したのは昭和五十年頃であった、古ぼけた神社の横手に、わずかに土盛りがあった、南に廻ると天井石に割目の入った花岡岩の、狭い羨道の奥に更に狭く、上下左右を切石で囲んだ玄室が見へて居た。その外にも神社の後方に露出した大石が見へて、家内が「これも古墳かしら」と云ったのを覚へて居る。二回目は一昨年の古墳巡りの時で、その変り様に驚いた。修理された神社はとも角、後の小山が削られて境内の様子が変り、墳丘の廻りには柵が、羨道入口に鉄の戸が取付けられている、整備されたと云う事であろうか。私しは以前に見たもう一つの古墳を探したが様子が変った故か、見付からなかった。今回は三回目である。羨道の戸が開いて中に入り講師の先生に手取りで漆喰の跡を教へて頂いた、得難いチャンスであった、何故なら、石室天井の崩壊が意外に進行して居て、何等かの補強がなければ次回以降は中に入るは危険と思われたからである。それはそれとしてもう一つの収穫は、懸案の二号墳を確認した事である。そしてもう一つ最後の加茂公民館での事、質疑の時…これこそ、この会ならずば…を実感した、それは「猪の子古墳は実際に使用されたのであろうか」との意表を衝く質疑と「夾紵棺位は」のやり取りなのであった。

歴史民俗研究部会 夏季行事案内

暮しの中の年中行事を学ぶ
日時　7月27日（土）13時30分より
場所　福山中央公民館
内容　春から夏にかけての年中行事を学習する　参加自由、無料
「国宝の島」大三島を訪ねる
実施日　8月18日（日）
行き　福山駅発7・43ＪＲ－尾道駅着8・00　尾道港発8・30高速船－井の口港着9・10
見学地　大山祇神社、宝物館、海事博物館など
帰り　井の口港15・55発－尾道港着16・35　尾道駅発17・05－福山駅着17・22
費用　ＪＲ、船乗車券往復等計五〇〇〇円　各自購入
集合　福山駅釣り人前7時30分又は尾道港桟橋8時15分
申込み　不要　雨天決行
問い合わせ
（0849）54－2047（種本）

北部図書館行事案内

歴史講演会
（時）8月24日（土）午後2時
（所）北部図書館2Ｆ集会室
～窪田次郎とその時代～
（講師）園尾裕市教委学芸員

豊松村史跡めぐり

佐藤　秀子

戸を開けると、ストーブの炎の色が明るい。ふわーっとした暖かさが雨で冷えていた体を包む。公民館での楽しい昼食は、豊松村の方達から頂いた新米のおむすび、塩のよく効いた沢庵、そしてやさしい心をいっぱいに頬張って満腹。

資料館に重ねておいてあった教科書は昭和初期発行のものがあり、わたしも使った、わたしも…と皆さん、とてもなつかしそうだった。本の余白の書き込みや、間に挟んであった当時の印刷物やしおり、いたずら書きは、四十年を経た今も生きて呼吸しており、ほのぼのとした気持にさせられた。

さて、次は雨の中を別所城跡（恩ケ丸ともよばれる）に。ここは小高い丘、頂上には内藤氏一族のものと言われる五輪塔墓が寄せ集まっている。後世の人達の配慮か、死後も話はつきないだろうから。栗がたくさん落ちていて、女性会員は栗拾い。秋の山は余得もありーっ。

新庄山城は中世に当地方に勢力をもった内藤氏の本城と資料にはあったが、ぐるぐる巡りながら登った山城は屋根伝いの時、吹き上げる風にひやっと肝を冷し、湿った落葉の足もとはすべりがち。けれど、雨風にうち震える紅葉は雨も厭わぬ会員達に、しっとりとしたあいさつをしてくれ、寒さの中、熱っぽく語って下さった講師のお話は、日頃あまり馴染みのない地方の武将の生き様を、わたし達に（近年にない雨の例会と共に）忘れられない思い出として心に刻んで下さった。

下から見上げるとすくっと立った大杉は見事でその上にあるいくつものコブは異形の貌…途中までの貴公子然とした様はまるで矯生させられたようで、瘤は、それに対する納めようのない不満やもろもろの言いたい事をすべて内包しているようだ。一つ一つに耳を近づけてその含む言葉を聞いてみたい。

鶴岡八幡社は巨杉が多く、みていると、雑木とは、又違った清新さで身のひきしまる思いがする。神社には柿本人麿が石見国へ下る途中立寄って、杉をみて歌を詠んだという伝承がある。彼が石見国から妻に別れて上り来る時の歌や反歌が万葉集にのっており、季節は秋のようである。

秋山に散らふ黄葉　しましくは
な散り乱ひそ　妹があたり見む

しばし、古のおもいを歌から偲ばせてもらいましょう。

道の横を流れる小川でさえ水量は多く、少し奥まったこの地では、まだまだ自然はこわされてないと嬉しくおもった。帰りのバックの中には石灰岩の多かった小石や柿の葉がお供をしており、心はうきうき、まことに野趣あふれる一日でありました。

備中高松城跡と足守の史跡を訪ねて

浮き世おば今こそ渡れ武士の
名を高松の苔に残して

と云いて壮列な最後をとげた清水長左衛門宗治。

来年平成四年（一九九二）が水攻め四百十周年にあたる。しかし何んとも不可思議は、あれだけの堤防工事を、わずか十二日間と云う短期間のうちにやりとげたことである。今から四百年前の秀吉の戦上手はその経済力を振るに使い、只力攻めより自軍の兵力を、いかに最少限に押え、これまったく近代戦争の走りである。宗治に同情し亡くなった広島県御調郡久井町羽倉城主末近四郎三郎信賀の辞世

君が為名は高松に止め置きて
心は残る故郷の方

…人の世のはかなさを感じる。

又、足守は旧藩主木下氏の領地である。初代家定は豊臣秀吉夫人、北の政所の兄でここから、たくさんの豊臣氏関係の資料が発見された。

ちなみに私が昭和四十一年新人物往来社歴史研究会に入会した。そして始めての掲載が昭和四十二年一月号のふるさとの城、豊後日出城で江戸時代木下家定三男の延俊が二万五千石で入封している。この延俊は北の政所が一門の中で最も愛した甥である。又、この城下海岸からあの有名な城下カレイが生息して美味である。

俳人高浜虚子は

海中に真水わきて魚育つ

と詠んでいる。

その様なことでその論文を見せた所サインをもらった。又、名刺をいただき、何んでもこの夏広島で足守木下氏の資料展が開催されるそうである。と云うのも広島浅野公は北の政所の妹ややが嫁いだ所で豊臣氏一門でもある。

水無月や清水流れて城落ちる。

一言話

。何あれが有名な高松最上稲荷か
それにしても僕は彼女のい稲荷
（云いなり）（後藤記）

丸亀聞き語り

佐藤　秀子

幼い頃、丸亀から琴平ゆきの路面電車に乗っていて「ばんじーん、次はばんじーん」と言う車掌の声を聞きながら、変な地名だなと思っていたが、後日、それが番神宮の略だと知った。

番神の思想は約千二百年前の平安時代の初め、最澄が中国の唐から帰り、比叡山に天台宗法華経の道場を開いた時、その山門を守護してもらう為、これまで日本にあった神々を祭ったことが始まりだそうだ。その後、慈覚大師円仁は法華経八巻約七万字を越える経典を三カ年かかって写経し、この経を安置する堂を比叡山横川に造って根本如法堂と称し、この法華経の守護を日本国中の主な神々三十神に一ケ月三十日を一日交替で守護するよう定めた。これを三十番神といい、現在も横川如法堂の隣に鎮座している。その後、日蓮上人によって法華教の教えを実践し布教するためには、まず日本の国の祖霊ともいえる天照皇大神をはじめ、他の神々に敬意を払い、加護を願わねばならぬとの考えから法華経とともに大小の神々を祭ることになり、以後、法華宗関係の寺院では境内に番神堂が建てられ鎌倉時代～徳川時代にかけては武運長久・戦勝祈願、徳川時代以降には家内安全、家運繁栄等を祈り武士階級はもとより一般庶民の信仰も厚かった。そして、番神の思想は守護せられるものによって、吾国守護三十番神とか如法経守護三十番神（丸亀の番神はこれである）等に発展していった。

円仁の勧請した日本国中の著名な神々と守護に当たる受持の日と神像を、わたし達に馴染み深いものをあげると左記の様である。

一日…熱田大明神（愛知県名古屋）衣冠
二日…諏訪大明神（長野県諏訪）狩人姿
十日…伊勢大明神（三重県伊勢）黒束帯
十五日…春日大明神（奈良県奈良）鹿座
三十日…吉備大明神（岡山県岡山）黒束帯

丸亀の三十番神は一体ずつの木像で京都の仏師によって天保から弘化の頃、作られたものでまだ新しい。あと市内には三寺ほど三十番神を祭ってあり、藩主、家臣にも番神はよく信仰されていたようである。

一日ずつ大明神に守護してもらうという考えは、気分的にはゆったり安心、一日とて危険な日はないわけだから、わたしも江戸時代の人に倣ってみたい気もする。

丸亀藩は生駒家四代四十七年、山崎家三代十七年、京極家七代二百十年と続いたが、なかでも京極家は名門であり、祖は宇多天皇より出た佐々木源氏で、源頼朝の重臣として成し、室町時代前期には足利尊氏を助けて幕府をつくった。応仁の乱以後、家運が衰えたが高極高次が信長、秀吉、家康に仕えて、お市の方の娘を妻とし再興をはたした。息子の忠高も秀忠の娘初姫を妻にもらい、その甥が初代丸亀藩主高和となる。

丸亀には今でも、風袋町、御供所町、餌差町（鷹の餌を調える人達が住んでいたので）、二軒茶屋等の町名があり、城付近は番丁、大手町と呼ばれている。その大番丁にあった御用屋敷（三三二坪あったという）に江戸町奉行鳥居耀蔵が弘化二年（一八四五）から明治元年までの二十三年間、幽閉されていた。

耀蔵は、儒者、林述斉の次男だったが後に旗本の鳥居一学の養子となり二千石をもらっていた。天保八年の大塩平八郎の乱の処理、さらに渡辺華山や高野長英らの幽閉で老中水野忠邦に認められて天保十二年、江戸町奉行となり甲斐守を名乗った。その後、検約令、人情本の発禁等を行ったが、幕府の統制強化に反発する大名達によって弘化二年、水野忠邦は老中を辞めさせられ、耀蔵も七つの罪を負わされて、京極藩お預けとなり、十一月二十三日、丸亀へ着いた。丸亀へ渡る前、下津井で泊まったが、その時の旅館の賄い帳によると百八十二人の食事を用意したそうで、その大がかりな護送がしのばれる。

幽閉中のことについては丸亀藩士が記してあり、それによると、幽居の部屋は桜の木で組み立てた八畳敷の座敷牢で、牢とはいえ、その生活は豪華で小大名格であった。手拭、帯、下帯などは強く力を加えれば切れる程度のものを（自殺を恐れての処置）使用させていた。次の間には丸亀藩士五、六人が常に控え耀蔵の用事に当たり、御典医や茶道の相手も仕えていた。幽閉中は、学者林家の出らしく、常に読書し、屋敷内に稲や薬草を作らせ、世話をしてくれる藩士は、自分が気にいらなければ交替させ、気に入った者とはよく話した。長い間、世話をした藩士たちは耀蔵の学識によって感化され、医学や漢学に優れた者になったという。

丸亀藩も初めは恐る恐る耀蔵に接していたが十年以上もたつと情が移り、又、藩中においても難しい文字

や不明な事が起こった場合などには「甲斐守に聞けばよい」といって知恵をさずけてもらったそうだ。

今、資料館にある耀蔵作の漢詩が書かれた扇には七十三老人鳥居耀の署名がある。明治七年、七十八歳で亡くなっているので、年令がおかしいと思っていたら、数え年である。老人と書いた心中は懐古の情か、それとも自虐の意味か。けれど従容とした様は、さすがと思わせる。

以前…ロシアに漂着した漁民が、後日、送り返されたが、鎖国をしていた幕府は松前藩に命じて、一生、その漁民を竹矢来の屋敷の中で、（妻帯はさせたが）他への外出は許さず監視のもとで暮らさせた…という本を読んだことがある。死ぬまで外へ出たいと言い続けた彼の心は、諦念を持たない武士とは違っていた。せめてお墓なりとも、矢来の外へ建ててやればと思った。

丸亀城主三代高或の時、（元禄十一年）福山藩、水野家断絶後の在番として丸亀より船を十隻余り仕立てて行った。丸亀では、福山藩の家臣達と戦さになるかもしれぬと、用意怠らなかったが、無事であった。その期間は一年～一年半あまりで、丸亀からは再々慰問にでかけたそうである。全然、行き来がないと思っていたのに、意外であった。

高極家は、幕府とは深いつながりがあり、鳥居耀蔵を預かった。けれど二十年間に要した費用は莫大であり、その意図するところが丸亀藩の財力を弱らせる…という事だとすれば、六万石に対してさえ警戒した幕府の力の衰えを感ぜずにはいられない。

丸亀には、いまだ古さが生きている。蔦のからんだ土塀や、深く沈んだ泥の上を、想いを湛えた水でおおう堀、あちこちの辻にある石の建造物。それらのあたりに息づく、ほっとした空間は、わたしのぼんやりするひとときの発生地である。

中国地方における山中鹿介の足跡

後藤　匡史

限りある身の力為さん、願わくば我に七難八苦を与えたまえと、月山富田城、三笠山々上に出る月に祈り、主家尼子氏の再興に全智全能を傾むけ、ついには毛利氏の為、備中高梁阿井の渡しにて非業の最後をとげた山中鹿介幸盛。

それでは中国地方における鹿介の足跡を訪ねて見よう。

。島根県能義郡広瀬町
月山富田城（尼子氏居城）

。津和野市
石州津和野四万三千石、亀井家
亀井茲短、鹿介義弟、江戸城席室、大広間詰、家紋・十一割角立四ツ目、菩提寺ゆかりの寺・護伝寺

。鳥取県鹿野市幸盛寺（鹿介菩提寺
亀井茲短建立）因幡鹿野一万三千石

。兵庫県佐用郡上月町上月城
大平山北麓尼子勝久四〇〇年遠忌追悼碑、山中鹿介追頌之碑
天文七年（一五三八）尼子氏播磨進出の処点
永禄十年（一五六七）落城
天正五年（一五七七）羽柴秀吉、毛利方の赤松政範を攻め亡ぼす。
秀吉、鹿介に城を託す。
天正六年（一五七八）尼子勝久、毛利氏に攻められ自刃、鹿介捕わる。

。岡山県高梁市阿井（合）の渡しにて鹿介討たる。落合橋附近に鹿介墓

。広島県福山市鞆の浦静観寺前、毛利輝元本陣、禅宗元、真言宗大寺にて七堂伽らんを備う。
延慶元年（一三〇八）中興、暦応二年（一三三九）の鞆合戦にて荒廃、安国末寺となる。
元和二年（一六一六）再建
位牌表、幸盛院殿大誉浄了大居士首霊神儀
衰天正六年（一五七八）庚午歳七月十七日討死、山中鹿介幸盛公

事務局だより

山城志第十一集原稿募集

今春発刊の山城志第十集は大変好評で残部十数冊になりました。

本年度も第十一集を発刊の予定で原稿を募集します。内容は備後地方の歴史、文化に関する論考、歴史の紀行文等です。四百字詰原稿用紙二〇枚以内、原稿締切は九月末日です。

会報五十二号原稿募集

締切は十月末日です。四百字原稿用紙五枚以内。内容は会に対する御意見、御要望。歴史に関するレポート、感想文、短歌などです。

事務局員募集

会報、行事案内等、会の事務を手伝って下さる方、全くのボランティア活動ですがよろしくお願い致します。〝やってやろう〟という方がおられましたら七森（五三一〇三七〇）まで御連絡下さい。

九月例会〃四国路の旅〃御案内

近代工業の粋を集めて開通した夢の架け橋、瀬戸大橋から波静かな瀬戸内海を眼下に眺めながら、四国の表玄関高松とを結ぶ坂出の町から始まる讃岐路、歴史ロマンの旅一泊二日のコース順の概略は、つぎのとおりです。

なお、要項は後日事務局からお知らせします。

記

一日目（九月二十二日）

丸亀城跡＝山頂に建つ三重三層の天守閣は、小規模だが城下から望んで堂々たる美観をなし、二の丸、三の丸を囲む四方張りの石垣は、高いところで二十一メートル余。扇の勾配とか、清正流の三日月形と呼ばれる石組みは見事な曲線美を描く。石垣の堅固さと美しさは有名である。

善通寺＝真言宗善通寺派の総本山。真言密教の開祖空海が塘の長安の青龍寺を模して大同二年（八〇七）から建立しはじめ、弘仁四年（八一三）に完成した七堂伽藍の整った寺院といわれる。四国八十八ケ所霊場の七五番札所。

善通寺市立郷土館＝この郷土館は明治三十六年建築の木造平家建寄棟造、面積五八〇、五平方メートル（一九三、五坪）あり、展示品は、旧石器時代の石器などの考古資料や、歴史資料・民俗資料など市内で発見されたものばかりである。

王墓山古墳（有岡古墳群）＝有岡地区の中心に所在する独立丘陵上に築かれた前方後円墳であり、主体部は横穴式石室で、玄室からは多量の遺物とともに、瀬戸内海一帯でも数少ない「石屋形」が検出された。この古墳が副葬品の豊富さや独特な石室の構造などから我が国でも有数の古墳と評価されている。

宮が尾古墳（有岡古墳群）＝六世紀末頃に築かれた地下式と推定される両袖式横穴式石室墳で、羨道西壁に一体の武人像、玄室西壁には二体の武人像、玄室奥壁には人物群・騎馬人物像・船団などが克明に線刻されており、他のいずれのものより内容が充実し、優れている。

神谷神社＝「延喜式（九二七年完成）神名帳」に國幣小社として記載されている武内社で、本殿の化粧棟木に「正一位神谷大明神御宝殿、建保七年歳次己卯二月十日丁未始之、惣官散位刑部宿禰正長」と書かれており、建保七年（一二一九）すなわち鎌倉時代の建物である。建造年代の明らかな三間社流れ造建築として最古のもので、昭和三十年二月国宝に指定されている。また、木造随身立像（重要文化財指定）・舞楽面（坂出市文化財指定）ほか文化財が多い。

坂出簡易保険保養センター＝五色台（白峰）の高台に平成元年全面改装された「かんぽの宿」で、瀬戸大橋も一望のもと山の緑と海の青さが一大パノラマの様にうつる雄大な眺めはまさに絶景である。一夜の宿を求めるとすれば絶好と思う。

二日目（九月二十三日）

高松城跡＝「讃州讃岐の高松様の城が見えます波の上」と詠われた高松城は、豊臣秀吉の家臣生駒親正が築城した日本三大水城の一つで、三方を壕に囲まれた櫓が美しい。また、園内には、二つの築山を中心とする枯山水庭園がある。

女木島＝高松港沖合い四キロメートル海上、鬼が島と呼ばれる桃太郎伝説の島である。鬼が住んだという巨大な洞窟と、海岸沿いの民家の防風用のオーテ（石垣）とわらぶき屋根に目をひかれる。

四国村＝屋島の登山口に四国各地の古い民家や民具などが野外の環境に溶け込むように展示され、また、名匠・流政之氏創作の流れるような石畳、長さ三十一メートルの本物さながらの「かずら橋」など約二七〇〇〇平方メートルの園内に自然環境を巧みにとり入れたユニークな屋外博物館である。

さらに、時間の都合によっては、屋島山上への観光をする予定です。

以　上

会員の皆さんの賛同を得てより多くの参加を心からお待ちします。

旅行委員記

事務局日誌

三月十日　事務局会議（8）於中公
三月一七日バス例会〃小早川氏の城郭巡り〃講師末森清司　五三名
三月二四日事務局会議（4）於中公
四月一四日役員会（十三）於中公
四月二一日　同　（十）於ホーセン
五月五日第九回親と子の古墳めぐり　中条～加茂方面　参加六十八名
五月二六日事務局会議（8）於中公
六月九日バス例会〃高松城と足守を訪ねて〃講師種本実　参加五六名
六月一六日役員会（9）於中公民館

☆去五月十一日夜、田口会長の結婚祝賀会が福山ワシントンホテルで、百二〇名の出席者を集め盛大に催されました。

☆六月十九日、田口会長は県教委より広島県文化財保護指導員の委嘱を受けられました。（Y・N生）

備陽史探訪の会
事務局
〒720 福山市多治米町
五－一九－八
TEL（0849）53－6157